
めぐる

ryouka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めぐる

【著者名】

ryouka

N1758D

【あらすじ】

中学校の教師をして3年目がたち、私は副担任に選ばれた。担任は3歳年上のふざけたと言うか、下らないことをよく言う男で、まあそんなことはあまり関係ない。そんなある日の事、あたしの教え子が失踪していたらしい、その子は、もう転校して別の中学校に通つていてる子で、私が副担任をしているときも何度も何度か暴力事件を起こしている生徒だった。

13歳少女失踪（前書き）

天照沙希の中学時代の話です。けど関係ないです。天照が誰か気に
なる人は「超心理的青春」をお読みください。
ある小説のストーリーを変えたものですので、完全な自作ではない
ですのでご了承ください。

13歳少女失踪

お前の大事な親友が見つかつたらしいぞ、と三上くんに言われ、意味がわからなかつた。私の友達で、発見されるような、路頭に迷う友人はいなかつたから。

三上くんが、新聞を寄こしていく。

毎朝、中学校に出勤する私は、まずコーヒーを淹れ、できるまでにタイムカードの所まで行く。カードを通す。それからコーヒーを持ち、自分の机に座つて、新聞を開く三上くんのふざけた雑談に付き合つ。毎朝はこんな具合だ。朝の七時前、私と三上くん以外はまだ誰も来ていない。これもいつも通りだつた。

「十三歳、少女、失踪」と小さな小さな三面記事に書かれていて、その単語が目に入った。そんな細かく新聞を見ないあたしは、当然知らなかつた。新聞を見るとしたら、天気予報とテレビの番組欄だけだし。

「報道規制か何だかわかんないけど、『失踪少女発見』なんて、失踪したこと載せてなかつたのに、そんなこと書かれても意味ねえよな」三上さんは指を鼻に押入れながら、文句を言った。「忙しいとき誘いをかけてくる女と同じだ。暇なときに、誘われないと意味が無いんだよ。なあ大香山、そう思うだろ？」

私はそれを聞き流す。新聞には名前が記載されていた。失踪していた人の名前だ。記事には、無事に見つかり、両親の元に帰つたと書かれていた。

やつと三上くんの言つ、親友の意味がわかつた。それは、私の知つてゐる子で、2ヶ月前、転校していつたあたしの教え子で、記憶の一番手前の引き出しに閉まつていた。

「私たち先生にとつて、勉学を教え、1年のほとんどを共に過ごす子供達は、自分の友人のようなものよ」

それは学年主任の出雲先生が朝礼時に、よく口にすることだつた。

出雲先生は、私のいる中学校では教頭と校長を含んでも最年長で、年に似合わない、青春映画のような言葉を恥ずかしがらず、口にする。もしかするとそういうセリフが好きなのかもしれない。新聞を閉じる。なんとなく胸が痛む、私の大事な親友が失踪していたらしい。

その少女と出会ったのは、今から4ヶ月前、桜が舞い散りそうで、舞い散らない、まだ肌寒さが感じれる4月の初旬だった。その日の朝も、入学式だというのにいつも通り、隣の席の三上くんから話しかけられていた。新聞記事ではなく、雑誌に書かれた記事のことだ。「ギリギリセーフ」三上さんは機嫌のいい口笛を鳴らした。

「なにがギリギリなんですか？」興味もなく聞き返すのは、日課のようなもので体に染み付いていた。

「ほらこれ。中学生が同級生をいじめをやって、それが過激になつてきて、いじめられた奴、半身不随だつてさ」

「それのどこがギリギリセーフなんですか？」

「いじめが、同じ県で起きたんだよ。でも」その後三上くんは、いじめの起きた中学校を口にした。隣の地区だ。「あそこなら教育委員会も別だる。その隣の中学校だつたら、アウト。教育委員会からお叱りで、意味の無い説教を、聞きに行かなきやならなくなつてたんだぜ。定時以外の労働は、俺は嫌だよ。な？ ギリギリセーフだろ」

「あ、そうですね」

「何だい、大香山、元気じゃないな」三上くんはつこさつきました、「モテル男のここが違う」と言う記事にぶつぶつ文句を言つていてくせに、私の鬱な心を過敏に察知したみたいに、そんなことを言つ。

「そうですか？ いつもと変わりませんけど」

三上くんは溜息を吐いた。「まだ引きずつてんのか？ あの暴力事件だろ」

私も溜息を吐く。

それは卒業式に暴力事件を起こした、男子生徒のことだ。他校の生徒と喧嘩をしたらしい。それは、決定事項のようだ。きっと、義務感で。そういうことで、他校との争いを行い、自分の名を立める。

その行為を私は理解できなかつた。

その子はそれ以前にも暴力事件を起こしてて、私が若いということと、教科の担任で微妙な位置にいることで、そのときに指導を行つた。

彼は、会つてみると思つた以上に聞き分けがよく、素直な子だつた。いや、思えた。「俺が悪かつた。もう殴つたりはしない」と頬を伝う涙は私の心を打つたし、「好きな女がいるけど、こんななんじや嫌われるよな」とうつむきながら頬を赤らめ、指遊びしていくときには、仲を取り持つてあげたいと本当に思つた。

だから私は校長に、「3日間の停学処分でいいのでは?」とお願ひした。先生達の大方の予想では2週間の停学は避けられないと言われていた、しかし、中学3年生の2月を過ぎた停学2週間という期間は、普通の1ヶ月以上に及ぶのではないか、そう思えた。確かに彼は他校の生徒に殴る蹴るの暴行を加えたけれど、このまま好きな女子と仲良くなれないまま卒業式を迎えることは、彼の人生につつてもマイナスになると思えた。その意見は他の先生方にもわかつてもらえた。何よりの決定打は彼が「死んでももう喧嘩はしない」と誓つたことだろう。

それなのに、卒業式が終わつた後、その子はまた暴力事件で捕まつた。

そういうことはよくある。出雲先生の言葉を用いれば、「教師という職業が普通の仕事よりも多く経験できることは出会いと別れ、それよりも裏切られること」「らしい」。でも、そのときの私はいつもよりも数倍も悲しかつた。悲しすぎて、彼と再び会つたときも「何でなの」と迫つてしまつたくらい。きっと、生理とか、そういう女性特有的の症状のせいで私はそんなことを言つたのだろう。そう思つた。彼は、「反省なんてするわけねえよ、俺が悪いわけじゃないし、ただ、課題をたくさん出されるのが嫌だし、卒業前だし、それに大香山だし、ちょっと反省したフリでもすれば罪が軽くなるかなつと思つて」と舐めた口調で言つて、「まだまだだね」と嘲笑した。

というわけで、私は未だに落ち込んでいた。彼は、その暴力事件がきっかけで、高校に進学できなかつた理由もあつたのだろう。嘘をつかれた、もてあそばれた、というよりよも、ただ自信をなくしていた、と言うより自信なんて私にあつたんだろうか。

「仕方ないことだ」三上くんは軽々しく言う。「俺たちは、子供の言い分を聞いて、他の上司に適当に相談して、それを校長に報告して、それで終わりなんだよ。あの学籍簿に載つている子供の数を想像してみる。ひとりひとりに真摯に向かい合つていたら、教師なんて出来ないぞ」

「そうかもしませんね」

「俺たちは何千といる生徒達と友人になれるわけが無いんだよ。本当に仲良くなりたいんなら、駄菓子屋でもやつた方が早い話しだ」
本当に、三上くんはそういう棘のある言い方をする。「適当だよ、て・き・と・う。人のことでそんな真剣になれるかよ」

でも、三上くんは、私が出会つた先生の中でも、これほど抜群の人気を誇る先生は見たことがなかつた。受け持つた生徒が卒業した後も、彼の為に来校する生徒は、数え切れないほどだつた。本当に不思議だ。

空気を和ませる雰囲気を持つ出雲先生は、私にいつも言つ。「三上先生の天職は教師だろうね。でも、彼を見習つても何もないよ、ダメになるだけ」

吠える人

見習おうと思つても見習えるわけが無い。まあそんな氣はさらさら無いけれど。今でも鮮明に思い出せる三上くんのエピソードがある。それは、私の心の溝にはまって、永遠に取り出せる気がしない。私がこの中学校に来て3ヶ月が過ぎ、教師として始めて終業式を向かえた頃、学年の先生達が歓迎会を開いてくれた日の事。二次会のカラオケを出た後、私は三上くんと商店街を歩いていた。最寄り駅に行く途中だった。

知り合つて間もなかつたので私は、三歳年上、二十五歳の三上くんがどれほど特異な人間か知らなかつた。職場で1番年が近い彼のことを、先輩として頼ろうとしていたことは間違いなかつた。今思い返すと、本当に愚かなことだと思う。私は阿呆だ。

高校生くらいの男子四人が、首輪のない犬を囲んでいた。囲まれているのは、シベリアンハスキーのよだな大型犬ではもちろんくて、どこにでもいる中型犬だつた。少年は何やらぶつくさ言つている。

私はその状況を目の当たりにしても、すぐに助けるという選択肢が浮かばなかつた。その犬を助ける為少年達に注意するか、それとも見て見ぬフリか、それとも警察を呼ぶべきか。

そう考へてる間に三上くんは、少年達にどんどん近づいていった。迷いがあるように見えなかつた。私はさすが男性は違うと、尊い目で見つめてしまった。けれど、それが間違いだつたとすぐに気付かされる。

「何してんだよ」三上くんは少年達の輪の中に入ると、ポケットに手を入れて爽やかに言つた。芝居っぽいけれど、何でもいいから、「暴力はやめる」と、その瞬間に蹴られそうになつていていた犬を助けるように立ち。

「何、あんた関係ないだろ？」動物愛護団体か「周りの少年等も当

たり前のように頭に血を上らせてている。彼らはそこそこ鍛えられた体つきをしていた。柔道部員ほどではないけれど、それでも三上くん一人では負けてしまうんじゃないだろうか、と私に不安がよぎった。

けれど、三上さんが取った行動は、私の考える全ての事柄を超えていた。

「だまれ、ボケが」と誰でも聞き取れる声で言つたあと、すぐ後ろに振り返つて、柴犬にも見える雑種の犬に向き直り、何とその犬の口に自分の手を思い切り突つ込んだのだ。犬は驚いた拍子にその手に噛み付いてしまった。

「はい？」と私は驚いた。回りの少年達も同じだろう。「何だ？」とお互いの顔を見合つていい。例え言葉が通じなくてもその犬の気持ちは私達と同じだつただろう。ただ一人、三上くんを除いて。

三上くんはそんな空気に気付くこともなく、犬を抱えて、私のところに颯爽とした歩みで戻ってきた。とても満足そうな表情をしている。

「何してるんですか、犬？」

「こうすれば、あいつらも犬は噛むんだと認識して怖くなるだろ」自分から手を突つ込んでよく言うよ。そしてもう一度振り返り「お前ら犬に噛まれたことなんてないだろ？俺の勝ちだ！ガキはカラスが鳴つたら帰りやがれ」と犬をダンベルのように持ち上げ、ざまあみると叫んだ。

少年たちはキヨトンとし、首を斜めに向けて、いきなり起きたシヨートコントのせいで頭が回らなくなつたのか、顔が引きつっていた。そしてなぜか、そのまま駆け出していく。彼らから見た三上くんは余程の奇人だつたのだろう。それは私から見ても、もちろんそうだ。

犬を抱えたまま三上くんは駅とは違つ方向に歩いていく。

「どこ行くんですか三上くん」

「どこつて、決まつてんだろ？ 保健所だよ」私は耳を疑つた。

「保健所って、殺されますよ、そんなとこ持つて行けば、わざわざ殺しに行くのだろうか？ 例えそれが法に則つていても、正しいこととは思えない。

「何を当たり前のこと言つてるんだ、殺しに行くんだよ」「逃がせばいいじゃないですか」

「逃がしたつてまたこんな目に会うだけだ」

「何も殺さなくたつて、それにこんな時間に開いてる訳無いじゃないですか」

「朝まで待つ」 そう言つと彼は、月明かりの元に走り去つていった。満足そうな顔をして。

どんなことが遭つても、三上くんの生き方を他人が真似できるわけがない。

駄菓子屋をやつた方が早い、なんて教師らしからぬ」とを言つた三上くんは、その後も新聞をがさがさとめくつて、今度は、「これ、こっちの記事は知つてるか」と誌面を向けてきた。

「あつ、それだつたら今朝のニュースで見ましたよ」私は答えた。ある大学の化学実験室に女が忍び込み、研究材料である薬剤を奪つたという事件だつた。犯人は、そこに何があるかわかつていて、その薬剤を奪つっていたのだという。その場にいた大学院生達は記者に記者に対して言つていたのを覚えている。その大学院生達は記者に囲まれて少し興奮気味に見えた。「鬼婆みたいでしたよ」と言つて、記者たちを困惑させた。20代半ばで言つよつた言葉ではないだろう。彼らは事件を叩撃したことによりシヨックを受けていた、と言うよりも、たくさんの報道陣の前ではしゃいでいただけなのかも知れない。

「これははうちの中学校の近所なんだ」

「本当にですか？」

「この事件の犯人はまだ捕まつてないから、もしかすると、うちの学校にも何か奪いに来るかもな」

私は雑誌に載つている犯人の似顔絵を見た。長い髪の毛が右往左往していることしか頭に入らなかつた。「こんな髪の毛がボサボサの女性がいますかね」

「そんなんわかんないだろ。見た目で決め付けるのは、子供が一番嫌うことなんだ」

「いやいや、それとこれとは別の問題でしょ」

「関係ある！ 絶対に、女だ。かけてもいい」三上くんは、ガキみたいにムキになる。「大香山の推理はハズレだよ、この人は男と思わせる為に髪を整えずに来たんだよ、いつかこの学校に来るや。きっと

「不気味は発言はよしてくださいよ」そんなことなくとも、私は絶賛スランプ中なのに、こんな頭がボサボサで不気味な女性が現れたら、私は間違いなく生徒を置いて逃げるだろう。

本立てから取り出して、副担任となつたクラスの出席簿をパラパラめくつてみる。

そこに数日後、暴行事件を起こす生徒の名前が書かれているとは、考へてもなかつた。いや考へたくなかつたのだろう。

他の先生達もバラバラと姿を見せ、時刻も8時を過ぎ、一日の仕事が始まる。新1年を担任する7人の先生と、副担任と共にそれぞれ、クラスのことについて話し合う、校長は言った「第一印象はどんなものよりも大事」と。

そして、何事もなく1学期の始業式が終わり、それから20分後、彼女は現れた。

彼女の隣には、3年生と思われる少年が3人立っていて、その横には出雲先生が立っていた。

出雲先生に話を聞いてみると、どうやらこの少女が、この男子3人組に暴行を加えたのだと言う。彼女は私のクラスの生徒で、こういう話は担任の三上くんが引き受けたんだろうけど、彼は職員室にいなかつた。というよりいる方が珍しい。

私は卒業式に付けられた傷跡をどう隠そうと思いながら、その3人をとりあえず指導室に連れて行くことにした。けど。

「どうして俺たちが指導されなきゃいかないんだよー」こいつが暴力ふるつてきたんだぜ」

私は彼女の目を見る。女の私でも一目ぼれしそうな顔立ち、透き通る空のような瞳、驚くほど白い肌、細い手足。その体のどこに、男子3人から勝利できる格闘能力があるのだろう?

目が合うと、彼女はコクンとうなずき、その事実を肯定した。

「ほらな、だからいつたんだよ」などと、色々言いたい放題で興奮している男子3人を指導できる能力を持つていらない私は、とりあえず彼らを帰宅させ、彼女の話を聞こうと思った。

「ほら、彼らはいないわ、好きに話していいわよ」あたしはできるだけ、親しみを込めて言つたが、彼女は全く動かない。

「大和美香さんよね、私のクラスの。新学期早々喧嘩なんて絶対理由があるに決まってるわ、それに相手は3年生でしょ?接点がある

わけないじゃない、ねえ話してみて」

しかし、彼女はさつきと同じように眉ひとつ動かさないで、自分の太もも辺りを見ている。

これ以上時間をかけても解決にならないと判断して私は「保護者に連絡するけどいい?」と尋ねると、彼女は一瞬凄くうれしそうな顔をして、また無表情になつた。

どうやら彼女は親にこの件を知られたいらしい。普通は隠したがるものではないのか?まあこうなつたのも親の責任だ。

「親は何時くらいに帰つてくるの? それとももう家にいる?」

しばらく沈黙が続く。これでもまだ話さないのかこいつは・・・と思つたとき。

「夜の10時以降なら大丈夫です」やつと喋つたよ、もしかして声が出せない人なのかなつて思つたよ。

「ちょっと時間遅いけど、わかつたわ、それじゃあ今日は帰りなさい」

私がそう言つと、彼女は軽くお辞儀をして、颯爽と教室から出て行つた。それにしても、あんな礼儀正しくて、言葉もきれいな子が、意味もなく喧嘩などするだらうか?

彼女が帰つた後、私はクラスの担任である三上くんに、そのことを話してみた。

「なんで、俺がまためんどくさいことしなきやいけないんだよ、副担任の君の勉強ためと思って解決してくれよ」本当にこんな男が担任を受け持つていいのだろうか、と言つ反論もしたいけれど、どうせ口で言い負かされるとわかつていたので、何も口に出さないことにした。

そしてその夜。私は彼女の家に電話をかけた。思つた以上に早く、2コールで出た。

「話しさ聞きました、明日の4時くらいからと考えていますが、その時間で大丈夫でしょうか」

「ええ、そちらの都合に合わせますので、それでは、明日16時に

職員室までお願いします」

そう言って、私は電話を切った。

大和美香の父親は思った以上に明るく、それでいて頭のよさそうな声のトーンをしていた。彼女の印象から思うと、父親は厳格で「趣味は盆栽」、という人間だったのだけれど、本当はその逆。現実はどうなるものかわからないとしみじみ思った。

天使なカブトムシ

約束の時間よりも10分遅れて、大和親子は職員室に現れた。美香の隣には、父親らしき男性が立っていた。昨日の電話の通り来てくれた様だ。

「美香さんのお父さんですか？」と尋ねる私の声は少し、緊張していた。2人の顔を見た刹那、一気に押し寄せてきた卒業式の出来事が記憶を突き刺す。

濃いめのジーンズを履いた男性は、「そうです」と返事をした。その瞳は右往左往していて、私の眼を見ようとしない、しかし声に何かしらの意志の強さを感じた。

身長は私よりも少し大きいくらいで、170cmあるか無いかだろう。痩せてはいるが筋肉質な体つきで、顔も30代の男性には見えない程、整っていた。けれどまさしく「今起きました」と言わんばかりの寝癖と田ヤ一具合に少し笑いかけた。それでも格好よかつた。娘も美人なら親もそうなのだろう、平々凡々な容姿に生まれた境遇に少し泣きたくなつた。

「美香さんも来てくれてよかつたわ」と言つと、つい1ヶ月前まで小学生だった少女とは思えない無愛想な言い方で、「当たり前でしょ」と返事をした。適度に崩して着こなされた制服、スラッシュ直ぐに肩まで伸びたストーレートな髪。恐らくこの中学校の女子達は彼女の服装や髪形を真似するのではないか、と言つほど、おしゃれで、それでいて校則を守つていた。

私はちらつと交互に、大和親子に眼をやつた。にこやかに愛想を振りまく父親と、人を遠ざけるような態度の娘。だらしなさそうな父と、キチンとした娘。内心でそう繰り返し呟き、2人を見た。

私は時間に遅れてきた親子に理由を聞くことなく、出来る限り、愛想良く振りまい「生徒指導室までお願いします」と言つた。

生徒指導室に着いて、私はまず話を聞くことよりも、指導用紙

を書いてもらつことにした。指導用紙とは、簡単にいえば反省文を書き、それに名前、家族との続柄を書く用紙だ。

この学校には古くからの伝統で、生徒が問題を起こし親も呼び出しされると、生徒だけに指導用紙を書かせるのではなく、親にも反省文を書かせることになっている。これは別に話しを終えてから書いてもいいのだけれど、私はこういうことをする前の心境を知りたいので、話し合いの前に書いてもらつてている。私は2人が書き終えるまでにコーヒーを入れに職員室に行くことにした。

「よお！ どうだ、指導はしつかり出来てるか」今、最も会いたくない男と出会ってしまった。

「私に仕事を押し付けといて、三上くんは何してるんですか」不機嫌な音を鳴らしながらコーヒーを作る私に彼は英國の国旗に似たジャケットのCDを渡してきた。「何の真似ですか？」

「もし困つたら、あの親子にこれを渡してくれ」

私は開封されているのにフィルムを被せているCDを受け取り。「だから、何ですか？」ともう一度訊ねた。

「ハイロウズの『angel beetle』ってアルバムだよ」ハイロウズって、聞いて慣れまわるボーカルのイメージしか思い出せなかつた。「これを聴くと大和美香が暴力を振るつたりしないんですか？」

「そんなんのは、本人次第だる。けれど、確實にいい方向に進む」三上くんは、また根拠の無い自信を前面に押し出した。

私はとりあえず歌詞カードを見ることにした。「アメリカ」という文字が目についた。

「有色人種はつぶせ 都合よくルール作れ 自分のミスは認めず
それがアメリカ魂」

「これは、大丈夫なんですか」私は驚愕の表情に違いない。

「大事なことは、自分を見つめなおし、考えることだ。来週まで

に、『このアルバムから好きなフレーズを選んで来い』って言えよ。
自分で選ぶことが重要なんだから』

「『こんな刺激の強い歌、思春期の子供が聴いて大丈夫なんですか
?』

「持つてくだけ持つてけよ、もしかしたら役に立つかも知れない
ぜ」と結局私は、無理やりCDを手につかまる。

つかめない

進路指導室には観葉植物や、絵画が飾られている。生徒達に圧迫感などを与えないようことにいう配慮かららしい。まず、私は自分の名前を口にし、簡単な自己紹介をした。それから父親が書いたと思われる指導用紙に目を通す。美香ちゃんや両親の略歴が書かれている。どうやらキッチリ書いてくれたようだ。

父親の名前は、日本神話に出てくる英雄に似ていたけど、まあ探せばいるだろうという名前だから、その英雄にちなんで命名された可能性はないともいえない。私は一応、尋ねてみた、少しでも場の空気を良くするために、「ヤマタノオロチを倒した英雄に名前が似ていますよね」と言つてみた。すると彼は、「そうかもしれないですね」と低い声それに陰鬱な表情で答えた。私は、どうやら聞いてはいけないことを聞いてしまったと判断して笑顔で「そうなんですよ」と返事をするしかなかった。人のトラウマはどこに潜んでいるのかわかったもんじやない。

父親の職業は「フリーター」となつていて、その年でしかも中学生の子供がいるのに、経済的に大丈夫なのか、と不安そうな顔をした私を彼は察したのか、「そう書くしかないんですよ、仕事のある時期とない時期があるので、けど収入なら普通のサラリーマンの5倍はありますから」と貧乏とは無縁そうな表情で彼はそういうが、私は全く信じられなくて「そうですか」「富む表情でうなずいた。

「それじゃ、その時期になるとお忙しいんでしょうね」

「忙しいってもんじやないですよ、死んじやうくらい」

「というと、今は暇な時期なんですか?」

「そうだよ、まあ仕事のことはこの辺でいいでしょ」

私はそれはそうだと思います、気分を取り直し、生徒指導を始めることにした。

美香ちゃんはその間ずっと空を眺めていた。

父親が、美香ちゃんの様子をじっと見ている。嫌な感じだ、と思った。娘を見つめる優しさや暖かさが全く感じ取れなかつた。睨み付けて、監視をする、冷たい目だ。

「ひとつずつ教えてくれるといいんだけど」「私は、美香ちゃんをこつちに集中させようと、穏やかに話を続けた。「その日の朝は何を食べたの？パンかな？」

まずは、簡単で日常的なことから答えを求める。穏やかな質問を続けて、この指導が、ただ闇雲にお前が悪い事をしたと叱る場所ではないんだということをわかつてもらつ。あくまで教師は生徒について中立の立場だと言うことを理解してもらつ。不安や警戒を取り除き、少しでもいいから信じてもらい、本心を話してもらつ。それが私の生徒指導のポリシーだ。

教育実習のときに、担当の先生に教えてもらつたことはこうだつた。「教師は心理学を用いて、どんな子供が非行に走るのか、理解することだ。そしてそれを適切に指導する。非行に走る子供なんて大抵、考えていることは同じだ、だから早く指導パターンを見つけるよ。」「それはどうなんだろう、私の人生経験では、確かに非行少年少女は似ている気もするが、決してその理由が同一なんてことは無いと思う。そう考えると、私はもしかして教師として向いていないかもしぬれない、なんてその頃は思つていた。

実際やつてみた教師の仕事は、パソコンで正確にタイピングをしたり、レジをすばやく打つて、スマーズに会計をする、なんていう単純なものではなかつた。

私たちは頭をかきむしり、時に心をナイフでさすような気持ちで、生徒達の処遇を決める。場合によつては、彼らに裏切られ、自信を喪失したりする。そう、私のように。

ふいに、三上くんが怒つっていたときの事を思い出した。去年のこととで、その時の学年主任から「早く生徒指導なんて終わらせろ」とせかされた時のことだ。「プロなんだから、生徒が起こす問題を指

導するくらいのパターンでどうしたらいいかわかるだろ、同じことばつかりやつてる奴らなんだから。さつさと終わらせて他の仕事を手伝ってくれ」とい加減なことをその主任は言つた。きっと記録的な猛暑の日が長く続いていたから、その主任も少しイラライラしていたのだろう。

そのとき、三上くんはこう言つた。

「生徒と向かい合うのにパターンなんてあるかよ。あいつらは計算式じゃないし化学式でも文法なんかでもない。そうだろ？ 人はそれそれオリジナルだつて思つてるんだよ。誰かと同じなんて言われるのはご免だろ？ 僕は例え太宰治やジョン・レノンに似ているつて言われたつて全然うれしくないね。それなのに教える立場のあんたが、『こいつは、こういうパターンで指導すれば丸く收まる』『以前にもこういう問題が起きたから一緒に対応をしよう』なんて型にはめたらおもしろくもなんともないだろ。好きな人に下の名前で呼べてヨツシャーと思つてたら、その子はみんなのことを基本、下の名前で呼んでいた、つて気付いたら凄い絶望感だろ？だから、先生は生徒と接するとき『他の誰にも似てない、お前はお前しかいないんだ』そう思つて接しなきやダメなんだよ」

演説ながらの三上くんの長台詞に、私は心の中でしつかりとうなずき、酷く感動したのを覚えている。ただそう言つた本人である三上くんがそれから10分もしないうちに、生徒を家に帰し、校長への報告書にペンを急がしている姿が見えた。気になつて声をかけると「不良のやることはみんな一緒なんだよ。話しても意味ないつて。それにもう終業時間だから早く終わらせないと」と言い始め、結局、何がなんなのかわからなくなつた。

出雲先生のありふれた言葉を借りれば、教師とは、「物を教える大人の心を持つと同時に、生徒と対話する子供の心を持つ人」らしい。

三上くんからすれば、教師とは、「毒を隠した食用きのこ」だそうだ。

それにもしても、目前の大和親子は手に取りにくかった。色々な感情が見え隠れする父親と無表情な娘、その異様さは手に負えるものでなく、スランプ中の私には強敵だった。

「終礼が終わってからだつたの？」と美香ちゃんに訊ねてみる。美香ちゃんの表情は一向に変わることがなかつた。けど、私が質問をすると、目だけは父親の方に一瞬だけ向ける。意識をしないとわからないほど一瞬だけ。

父親が、「それくらい答えてやつてもいいだら」と言つた。

私にはその言い方が気に入らない。でも、美香ちゃんは、父親の言葉に促されたのか、「その通りです」と答えた。「帰らうと思つて、自転車置き場に行くときに会つたのよ」

相変わらず美香ちゃんは、父親の顔をうかがつていた。チラッと目を動かして、やっぱりなんらかの許しを求めるように。父親もよく見れば同じように目をキヨロキヨロさせている。一体何かあつたのだろうか。そう思い、2人同時に話を聞くのは難しいと思い、父親には少し散歩に出てもらい、個別に指導を始めた。

美香ちゃんだけが、指導室に残つた。もう一度、質問を繰り返すと彼女の顔は少し明るくなつたように見えた。私は安堵しながらも、散歩に行つた父親のことが気になる。彼は部屋から出て行くとき、美香ちゃんを見つめて「がんばれよ」と温かい言葉をかけた。表情は笑つているのだけど、目が一切笑つていない。そういう顔はどんなものよりも冷たく感じる。

「お父さんって不思議な人だね、そう思わない」

「あいつ？ 確かにそうね」

美香ちゃんが父親を「あいつ」と呼ぶのは少し意外だつた。彼女の雰囲気からするとそんな乱暴な呼び名ではなく「父」など、そういう類だと思っていた。それに丁寧な話し方は日常で身に付ける意外、術はないとと思う、「あいつ」なんて敬語があつたかな？

「美香ちゃんは親とは敬語使つてるの？」

「いえ、全く使つていません」

「それにしても、家で敬語使つていないので、美香ちゃんきれいな言葉遣いできるわよね」

私がそう言つと、美香が腕を組み

「私は恐らく人よりも優れてるんでしょう。それより先生、『ちゃん』付けはやめてくれませんか？なんだか子供っぽいので」

そう言つところを気にするのが子供っぽいんだけど、まあいか。

「それじゃ美香さんも私には敬語を使わないでくれる？」

「何ですか？別にいいですけど」

私は敬語を使って本音で話せたことが今までの経験で一度もない。友人同士で敬語を使うことなどないのと一緒に親しくなる近道に丁寧な言葉遣いは不要だと思う。回りくどいからね。

「今日はお母さん来なかつたのね」

「母は旅行中だから」

「お父さんはあいつって呼ぶのに、お母さんは母って呼ぶのね」
美香はそこで困ったようにうつむいて、答えを探しているようこ
見えた。黙り込む。もう話す「」ではないと決め付けた表情をしてい
る。じれじや、埒があかない。

けど少ない会話の中で気付いたことがあつた。もしかすると美香
は話すことが好きなかもしない、そこに確証できる事実なんて
ないけど、そういう人の雰囲気がした。男子に喧嘩で勝つようだか
ら運動神経もよく、その話し方からすれば勉強も出来るだらう、そ
れにそのルックスとファッションセンス。クラスでも、学年でも彼
女は一目置かれる明るく活発な少女に思えた。

けど、彼女は中々、話そうとしない。話しをしたそつと見えるの
だけれど、何かに縛られたようにその口を閉じている。あと少しで
言葉が出来うなのに。きっと父親に何か言われたのだらうと勝手な
憶測を立ててみる。きっと「がんばれよ」という言葉に何か裏があ
るのだらう。『美香さんは休みの日は何やってるの?』気分を変
えてもらつために。話しを変えた。

それでも美香は話そつとしない。時計をちらりと見る仕草、何故
時間を気にしてるのだらう、早く帰つて見たい番組でもあるのだろ
うか。『音楽聴いたり』と言つた。

『音楽かあ、どんなの聴くの』

『洋楽も聴くけど、普通に流れてる「J - P o p」を最近じやよ
く聴くよ』彼女の雰囲気からするとクラシックとか言ひそうなだつ
たけれど、意外と一般的な答えが返つてきて少し安心した。

『お父さんはそれに対しても何か言つの』

『あいつは邦楽が嫌いみたい』と美香はボソッと言つた。『私が
聴いてると、黙つて睨んでコンポの電源を消すの。バカらしこつて
あの風貌からすると娘に対しても寛大そうに見えるのだけれど、や
はり人は見た目ではわからないものだ。』

『先生はどんな音楽好きですか』

彼女は少し困った顔をし、顔を赤らめて、「生徒にそんなこといつていいんですか」私はそういう意味で言ったのではなかつたけれど、彼女はそこらの中学生よりそういう情報に敏感らしい。

「そういう意味じゃないよ、私が好きなのはロックだよ。つとこ

誰にそんな言葉教えてもらつたの」

「そんなこと教えるのあいつしかいなによ

なんていう父親だらう。

「くだらないシャレ言つちやつて、先生、年いくつなの？」

「23」

「ほお」何か言つたげな目で私を見る。

「バカにしてるの？」

「して悪い? 23でそんな下らないこと言つてなくて、本当は40代じゃないの?」

「でも23歳がこいつのこと言つと逆におもしろくないかな」と私は、「逆に」と言つて、少しは美香も心を開いていた。

私の「下らない」シャレによつて、少しは美香も心を開いてたけれど、効果はイマイチのようだ。

「なんであいつらを殴つたの? 無差別? それとも腹が立つたから?」

「無差別じゃない」と思つた。

「悪いと思わないの?」

「別に」

そういうふた具合で途中まで会話は続いたけれど、その後で「何か理由があるんでしょ」と質問すると、黙つてしまつた。

「そのときの気持ちを教えてよ」私は、彼女の親友になつたつもりで、軽やかに言つてみたけど、美香は戸惑つただけだった。

「どうしても、話してくれないとまたお父さんと来なくちゃいけないよ」と少し脅して不機嫌そうに私は言つた。

美香は、「本当に?」と言つた。なぜか、嬉しそうだつた。そして、

それを境に彼女は何も話さなくなつた。

どうせ、再指導されれば済むのだろう、と甘く見られたのか、それとも私が気に入らなかつたのかわからないけど、とにかく彼女が口を開くことはなかつた。

仕方がない私は、父親を指導室に呼んでもらうこととした。美香には外で待つてもらうことにして、代わりに父親を呼ぶ。部屋を出るとき、彼女は振り返り、「アイツに私が言ったことを伝えといてね」「お父さんに？」

「そう、私が何を言つたか伝えておいて」

私は、「OK」と答えた。けれど、わかつてなかつた。伝えてと言わても。大和美香、あんたは私に何を話してくれたんだよ。

メッセージ

濃いめのジーンズを履いた父親は、思つた以上に強敵だった。会話が弾むのはいいことなのだけれど、表情は全く変わらず、笑顔のままだ。笑顔も度を越すと不気味に変わる。

「あの子に何か言われました?」と真つ先にそのことを訊ねられた。

「ほとんど喋つてくれなかつたんですよ」

「何もつて訳じやないでしきう?」彼は、子供の言動や行動を全て自分の管理下にしないと落ち着けない性格なのかもしれない。この父親は、自分が「フリーター」という社会的地位が低い職業なだけに、子供の生き方に間違いを起こさせたくないようだ。けれどそれが教育とは思えない。自分とは違う人生を歩めと強要されているようにしか思えない。自分が誤つたを行いをしたからといって、その人にとって、それが過ちになるとは限らない、人生とはそういうものだ。私は即興で分析した。

「美香さんは、邦楽が好きなようですが」

父親はその緩んだ表情を靴紐を解くように解いて、むすりと、不機嫌な表情になつた。

「お父さんは邦楽お聴きにならないんですか?」

「聴かないね、あんな下らないもの」いきなり不機嫌になる。

「ロックなんて良いですよ」私はバンド名を数組しか知らないのに、そう言つた。

「あんなの聴いてると脳内お花畠になつちまつよ」

それはあんたの脳内に、花の種を植えてるからだろ。

「他に何か言つてませんでした?」

「うんと・・・と私は引きつった笑みを浮かべ、「あまり喋つてくれませんでした」と認める。「美香さんは上級生と喧嘩したことを家で話されました?」

「喧嘩したということしか聞いてないです」

その後も彼女の思い出やら、趣味などを彼に聞いてみたけれど、出てきた言葉が「そうですか」と「知りませんでした」の一言だった。これならノンビリの店員の方がもつと色々教えてくれただけだ。呆れた。

「美香さんにはお小遣いあげてるんですか？」

「普通にあげてます」

「普通はどれくらいの金額なんですかね？」

「もういいんじゃないか、俺はフリーターなんだ、そんな人間にそういうことを聞くのか？ 今のは先生は」と顔を真っ赤にさせたけど、通常の声色で言った。理性のコントロールは出来るみたいだ。

「失礼しました、では美香さんはどのようなお子さんでしようか」「家でもあの通りだよ、感情の変化が激しい奴で、さつきまで笑つてたのにふと見ると怒つてるんだよ、そういう奴だ」くつと、思い出し笑いをこらえながら彼は言った。

何だこの親子は、細かいプロフィール的なことはあまり知つてないけど、性格は理解してるってことなのか。やはり強敵だ。というかつつかめない。

複雑なこの親子の関係性に、絶賛スランプ中の私にはもう手をいくつ上げても足りなくて、それは次第に思考は大和親子への疑心に変わり、先生として自信をなくしている私に更なる追い討ちをかけ、人間として狂う様を見て楽しもうとしているのではないか？ と思えた。

このままだと私の精神が崩壊し、大和親子の思惑通りになるのが嫌だったので、早々に面接を切り上げることにした。

美香を再び呼び、親子で並んでもらつ。「再度指導を行いますので、明日はよろしいですか？」とあたしが質問すると、「三上先生はいついられますか？」と質問を返された。なぜこの父親が三上君を知ってるんだろう？

「三上先生とお知り合いでですか？」

「ええ、ちょっとした仲で」と愛想良く返事をする父親に、「そんなことどうでもいいじゃない、バアカ」と言い放つ娘。

ちょっと親にそんな口の利き方ありなの、という感情がよぎつてすぐ、「それもそうだな」とへラへラ返事をしたので、人の家庭教育に口出すのも厄介なので、話を元に戻した。

「明日は大丈夫ですか？」美香さんだけでよろしいので

「明日はちょっと用事があるので、明後日でいいですか？」申し訳ないです」と申し訳なさそうに父親は言った。

「美香さん大丈夫？」と訊ねると、彼女は首だけで返事をした。ちょっと不安だったの、「来なかつたら迎えに行くから」と半ば脅迫まがいなことを言つても、彼女は首だけで返事をした。その顔は指導前より明らかに明るい表情をしていた。

再指導をする、と言われば、ほとんどの生徒は嫌な顔をする。面倒だし、不安にもなるだろつ。ただ、美香は違つた。今まで出会つた、生徒で喜怒哀楽の喜の表情を出す子は初めてだ、大体が、怒か哀だ。といつても生徒指導をしたことがあるのは、指の本数より少ないけれど。

私はなんだか腹が立つて、三上くんから預かっていたCDを美香に渡した。すがり付く気分で、「これ聞いて、宿題だから」父親もそれを覗き込んでくる。

「ハイロウズっていうバンドのアルバムだよ。結構有名だから聞いたことあるかな?」と聞いたこともないくせに、知つたような口を利いた。

「え！？宿題」

「歌詞を読みながら聴いて、一番好きなフレーズを私に教えて、ひとつで十分だから」

「わかりました」と美香はケースを開け、歌詞カードをペラペらとめくつた。父親が興味心身に覗いている。

正直なところ、音楽が人の心を変えると私は思つていなかつた。そんな魔法めいて口マンチックなことがあるわけがない、短期間な

ら影響されるだらうけど、人の記憶力なんてずつと覚えておけるほど上等なものではない。まあその影響を『える』期間が長いほど名曲と言つんだらうけど。こんな宿題を出している時点で、投げやりだつたことは否めない。

「今日はお疲れさまでした」といつて、見送りうとしたといひで、美香が小さな声で笑い出した。見ると歌詞カードを開いてい。心地のよい笑い声が次第に大きくなつてくる。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない、後で三上先生によろしく言つて下さい」なんだか嫌な予感がした。もしかして歌詞カードに手紙的なものを入れていたのだろうか？ けれどその程度で彼女があれほどの笑い声を出すのだろうか、考えれば考えるほど、頭がこんがらがる、これ以上の混乱は避けたいと思い、少し強引に部屋を追い出した。

大和親子に帰つてもらつてすぐ、職員室に戻りながら、携帯電話から三上くんに電話をした。「CDに挟まつてたものはなんですか！」三上くんに食つてかかつた。

「別に、お前が気にするほどのものでもないよ

「気にしますよ、何をはさんでたんですか？」

「知らなくていいことも世の中にはあるんだよ」そつ言つて、彼は電話を切つた。私は不完全燃焼に陥つたので何度も彼のダイヤルを回したけれど、マナーモードにされ、终いには電源を切られてしまつた。まあいいや、明日聞くことにしよう。

けれど少し疑問が残る。何故、美香は三上くんのCDだとわかつたのだろう。私は自分の物のようだに渡したのに・・・。やっぱり挟まつていたものに何か秘密があるんだろう。

私は気になつて仕方がないので、彼の家まで押しかけようと思つたけれど、やめた。

美香が指導を行う前よりも明るい表情をしてあれだけ笑つたのは私の力ではない。間違いなく、三上くんが挟んだもの、それのお陰

だ。

知ったかぶり

次の日、思いもしない場所で思いもしない人と出会った。駅前のスーパーで。私は学校帰りに夕食の材料を買いに行き、特に好物でもない「コアラのマーチ」を『おひとり様ひとつ限り』の言葉につけられ、買い物カゴに放り込んだすぐあとだつた。

「その年でそれはきついですよ」

私はその声に驚き振り返ると、想像通りの人物がいた。そんな凛とした声を出せる人間を私はひとりしか知らない。

「こんなところで会うのは偶然ね、美香さん」

私は教師という仕事が好きだし、それなりに誇りも持つている、けれど、仕事時間以外で学校関係者に会うのは好きではなかつた。労働時間外で仕事のことを考へるのは、どちらかというと芸術家に近いと思う。教師はそれとは異なるものだ。いや、生徒を教育するという点は芸術に近いものがあるかもしれない、なんて、都合のいいことを考えてみた。

「ちょっと卵を切らしてしまつたので、あとしょりゅうと」美香は買い物カゴを胸の位置まで持ち上げた。「あいつ1日1個卵食べないと、気が済まないみたいなんですよ」と白い歯を見せた。

「家の手伝いなんていいことよ」

「世話になりっぱなしはあたしの性に合わないので」

「そうかもね」私は答えながらも、混乱した。今日はこの親子、用事だつたはずなんだけど。それは間違いないはずだ、父親の希望で指導日を1日ずらしたのだから。

「時間大丈夫かな？　ちょっと聞きたいことがあるからこの喫茶店に行かない？」

「20分くらいなら大丈夫ですけど」戸惑いながらそう言った彼女を少し強制的に喫茶店に連れ出した。聞きたいことは少しじゃなくて、たくさんあるんだけどね。

私はミルクティーを、美香はアイスコーヒーをそれぞれ注文した。喫茶店は夕方なので、人はまばらで、適度のざわめきを保つていて、話しやすい環境だった。

「いきなりだけど、どうしてこんなところにいるの？ 今日は用事だったんじゃなかつたの？」

美香は少し驚いた表情であたしの手を見て、少し間を空け、「用事は中止になつたんです」

「それでお使いしてゐるのね、とこつひとせ、お父さんは嫁でいるの？」

「出かけちやこました」 そつまつて、アイスコーヒーに手を伸ばす。

「昨日よりも話しやすい感じがするけど、いつもはさうなの？」私は思つたことを口にした。

「そうですか、まあ昨日はああいつ場だつたからだと思います。普段はこんな感じですよ」 そう言つてストローに口をつける。

「それだけじゃない気がするけど」 私がそう言つと、彼女の口へ流れるコーヒーが止まつた。どうやら図星のようだ。やつぱり私の予想通り。

「昨日の歌詞カードに挟まつていたやつのお陰でしょ」

「わかつてましたか」 冷静にうなづく彼女。どうやらシンボのようだ。私はその内容が知りたくなつたので、はつたりをかけてみた、普通に聞いても彼女は答えてくれそうにないし。

「勝手に見ちゃつてごめんね、でも重要そだから少ししか見てないよ」

「ええ、とても重要でした。三上先生はやつぱり切れ者のおつです」と少し面接げに彼女は言つた。美香は三上くんの何を知つてゐるのだろう。この2人、いや、三上くんとの親子の関係性を知りたい。それは単なる好奇心以外の何者でもない。

「でもお陰で手間が省けたよ、まさか向こつからアプローチかけ

てぐるとは思わなかつたから」 そうだね、と適当に相づちを入れる。

「 これで任務完了。こんなことなら喧嘩なんてするんじやなかつたよ」 と彼女は溜息をついた。どうこうことなんだろ、どうして喧嘩と三上くんが関係するんだ? これ以上わからないことを聞くと頭がパンクしそうになつたので、話の方向を無理やり捻じ曲げる」とにした。

「 まあそのことば、学校で聞く」とするわ、 こいじやあれだし ね」

「 そうですね、もし聞かれたら危ないですもんね」 また彼女は不思議なことを言う。

「 ところで先生、シロップの量はもうひんべん16 mlですよね」と満面の笑みで言つた。

「 いくらコアラのマーチを買つてもいまで甘党じやないよ」
「 鈍いなあ先生、シロップで思い出せないの?」

「 もしかして・・・」

私は、美香の顔をじっと眺めた。

「 もしかして駄洒落? シロップ16 mlとかけて」 そうこうと、彼女は頬を真つ赤にした。

下らない駄洒落というのは、高校生にとつてはむしろ恥ずかしい失態に近いものじやないの? と言つてみる。彼女は弁解するように、「 先生に会わせてみただけです。こうこう駄洒落が好きな人だ」と思つたから。私、相手のレベルに会わせて話すのが得意なんですよ」と苦笑いをした。

「 まだ私、23歳だから、そういう感性ないよ」

「 え?」

「 だから、おばさんじやないつてことよ」

「 でも、私より8歳も年上だし」

言い返そつとしたけど、思い留めた。まあいや、23歳が若いかどうかなんて「 スイカは野菜の仲間なんです」とこのと回じくらこ、生活に支障のないことだ。

「そうだ、先生、私たちと宿題やつてるよ」美香はそう言うとカバンからMP3プレーヤーを取り出し、ヘッドフォンを私の耳に押し当てる。私が渡したハイロウズのアルバムだろう、曲は知らないけど、声ならわかる。

「持ち歩いてるんだね」何だか少しうれしい気分になつた。

「結構いいですね、下らないことを忘れさせてくれます。彼の声は」

確かに、彼ほど弾けて狂つた声を出せる歌手はそうはないだろう。

「こうこう音楽は好きなの？」

「あまり聴かないけど、これはなんていうか面白いです。バカっぽくつて」

「バカはいいことだよ」私も同意する。バカは時に褒め言葉になる。そう言えれば高校生のときにつき合っていた彼が、「じつええ感じのコントつて本当バカだよな」としみじみ言つていたのにも、「尊敬」の意が込められていたのかもしれない。

「これあいつも聴いたよ

「もしかしてお父さん？」

「三上が貸してくれたものをほつとくわけにいかない、って言つて、家に帰つてから2人で聴いたの」

「仲のいいことね」高校生のころの私は、父親を意味もなく嫌つていた覚えがあるので少し驚いた。

「で、あいつ泣いてた」

「あのお父さんが泣くんだ」私はさらに驚く。

美香は、「うん、私も意外に思つた。あいつ悲しみの心なんて捨てちゃつたような性格してるから、確かにこの歌だった気がする」そう言つて、美香は14曲目に変えた。最後の曲のようだ。

私はこの歌を知つていた。テレビでも何度か聴いたことのある曲でシングルだった気がする。2人でヘッドフォンを分けて聴く、美香はR、私はLで。

聴き終わると彼女は言った、「どうしてこの歌で泣いたんだろう」
そんなことは私にもわからない、人の感情なんてどこから沸いて出
るものか見当もつかないし。

「でも、私もこの歌好きだよ」

「私も」そう言って美香はアイスコーヒーを一気に飲み干し、「
もうそろそろ時間だね」と言った。そうか、約束は20分間だった。
まあ有意義な時間を過ごせたよ。
すると美香は笑顔で思いがけないことを言った。

「今から、あいつと三上先生に会いにいりつか?」

私は美香について、「美香の父親と三上くん」が待ち合わせをしている場所に向かった。それはもちろん偶然だったのだろうけど、私の家の近くだった。

街中から郊外へと国道沿いの歩道を並んで歩き、とりとめのない話しをした。美香はどうやら私の思ったとおり、陽気で活発な「ぐく普通の中学生のようだった。ただ、礼儀正しいところだけは違い、それ以外は、適度に照れ屋で私よりも聰明な部分も覗かせ、それでいて不器用でもあった。

「昨日は緊張してたの？」と何気なく訊くと、美香は途端に不思議そうな顔色で私を見つめた。「三上くんの手紙、盗み読みしたんでしょ」と微笑んだ。今日はそればっかりだ。美香は私が恋人もないことを知ると、嬉しそうにはしゃいだ。「嘘ばっかり、相手は三上くんでしょ」と身震いしそうなほど不気味なことを言った
「ありえないよ、それなら3年の佐野本くんのほうがマシだよ」と中学校でもそこそこ名の知れる顔のいい生徒を口に出した。

「先生がそんなこと言つていいのかな」
「先生にだつて、潤いは必要なのだよ」私は返事をする。「美香さんは好きな人とかいるの？」

すると彼女の表情が変化した、青ざめたかと思うと、すぐに顔をゆがめ、耳を赤くして、「昔はいたよ」

私はそれを見て、彼女が持つ、陰りある部分がそこにあるのだろうと、想像した。勝手な憶測は危険以外の何者でもないけれど、美香の寂しげな横顔が、私の脳内にそう伝えた。それしかなくらいに。

「彼氏いないなら紹介しようか？ 十歳上のおじさん」と私が言うと、美香は、「どうせ別れちゃうからいいや」と苦笑いした。
三上くん達の待ち合わせ場所は、誰でも入りやすい居酒屋じゃな

くて、高級感のあるバーだつた。地下鉄の駅近くにそれはひつそりとたたずみ、どこか近寄りがたい雰囲気をかもし出していた。

「なんだか入りにくいね」と私が言つと、「ここまで来たんだから行こうよ」と美香に手をひかれる形で店に入ることになった。にしてもあの2人は何でこんなところで夕方から酒を飲んでいるのだろう、夜からなら雰囲気もあってまだ納得できるけれど。

店の中に入ると、外見に比べて、やや高級感は落ちるもの、黒で統一された店内、ずらりと並べられた酒、木製のカウンター。それは高級といつて間違いないほど立派だつた。

すると、奥から店員が現れて、「すみません、まだ営業準備中なので」と言われ、追い出されるように、入り口付近まで追い詰められた。私は隣にいる美香に確認を取る、「本当にここなんでしょうね」

「一番右隅のテーブルに座つてゐるわ」と彼女は冷静に答えた。結局私は確認できないまま店内を追い出されてしまった。何もそこまでして、退店させる必要も無いと思う。あの店員の慌てぶりはまさに、異常と言つ文字がよく似合つ。それほど挙動不審でもあつた。

私たちは、仕方がないので帰宅することにした。

「やっぱり、まだ何か重要なことを隠してゐるわ」と美香はつぶやいた。

「重要なこと?」私は無難な受け答えをする。もし余計なことを言つて、三上くんからのメッセージを見ていないと言つ事實を彼女に知られると少し面倒だから。

「そうよ・・・一体何を隠してゐるんだら?」それは私も同じ考えだつた。一体あの2人にどのよつな接点があつて、嘘までついて会つてゐるのだろう。三上くんに限つては本当に怪しそう。彼は、私よりも時間外労働を嫌う人間だからだ。あの人が時間外労働をしているところなど今まで片手で数えれるほどの日数だらう。そんな男が、仕事終わりに生徒の親と会うわけがない。

もしかして私は、あの2人に何かだまされているのだろうか?

2人が私を騙す必要などどこにもないのだから。それは美香も例外ではない、現に私は彼らの姿を見ていないのだから。私は最終的に、先生として最低だと言えるだろう、生徒を疑うことをしていた。この考えは間違えている。そう思いながらも帰り道はそれしか考えれなかつた。

「大香山、それは騙されてるんだよ」三上くんは、私が考えたくないことをあつさりと言つ。

またしても朝の職員室だ。私は昨日の放課後、たまたまスーパーで美香に会つて、三上くんと彼女の父親が密談しているであろう、そのバーに案内されたことを告げた。

「知つた風な言い方しないで下さい」

「だつて、お前は俺たちの姿を見てないんだろ？ 僕はそんなところに行つてないし、といつことは大和美香は嘘をついてるつてことだ、だろ。知つた風じゃなくて知つてるんだよ。ああいう高慢ちきなガキは信用するんじやないよ、きっと何か企んでるんだよ」

「企む？」

「想像は大体ついてるよ」自信満々なところが不安にさせむ。「美香は何かを隠している。そしてお前に嘘ついてるんだよ」

「あの子はそういう人を騙すようなことはしないです。それに父親も意外と隙がなさそうって言つたか、そう言つとこりをすぐ見抜きそうですが、仲も良さそうだし」

「だから」三上くんは苛立つて、「そういう風に見せかけただけなんだよ。美香はそういう澄みきつた心を持つて正義感の強い生徒。そう演じていたんだよ。実際は段取りを決めてたんだ」と人差し指を立てた。

昨日までのことと思い出してみる。子供を溺愛するがどこか冷たい雰囲気の父親と、その優しさに甘えつづも、少し距離を置いて接しているように見えるその娘、あれが演技だつて言えるのだろうか。

「そういう風には見えなかつたけど」

「面接のときとスーパーであつたときは感じが違つただろ？」

「全然、驚くくらいでした」これは認めるしかない。

「わかつたよ」三上くんが怪しい微笑を浮かべる。嫌な予感以外

しない。

「その家の母親いないんだろ?」

「そうです、どうやら旅行中のようだ」

「嘘だよそれ

「は?」

「その父親が殺したんだよ」私は寄りかかっていた椅子から飛び出すように体を起こした。

「ちょっと待つてください、殺したってどうことなんですか」「そんなの簡単なことだよ」と三上くんはメガネをかけていないのに、中指でそれを上げる仕草をした。

「何を決め付けてるの

「決め付けるも何も決まってるんだよ」

「仮に万歩譲って、そういう事件が起きていたとして

「間違いなく起きてるよ

「三上くんと父親が会つなんて嘘つへ必要はないんじゃないですか?」

「それはだ」三上くんが田をキョロキョロさせた。どうせ話しながら屁理屈を考へてるんだろう。いつものことだ。「美香はお前が、俺がいるって言わないと来ないと思つたからじゃないか」

確かに美香は私と三上くんとの仲を疑つていた。

「昨日あの父親、娘が面接するの断つたんだよな

「そうです」

「それは、アリバイ工作の為だよ」

私はその言葉を聞いて、はつとした。三上くんの意味不明な推理は的を得ていいのかかもしれない。

「美香に自分のアリバイを他人に伝えることで、事件の犯人から逃れようとしたんだ、おそらくそのバーの店員も共犯者だろつな、店入つたら追い出されたんだろ? そんな店どこにあるんだよ、疑うしかないだろ」

「違うと思うけど」内心では事実を言つていいとしか思えない、

と言つ動搖が心を揺さぶる。

「実際は店にはいなくて別の場所で母親を殺していた。けどそんな見え見えに殺したんじゃすぐ捕まつちまうつてことで、バーで他の人と過ごしているといつアリバイを考えた。けどそれを証明する奴がいないとダメだ。そこでお前に「彼はバーでいました」と思われることで、第三者の立証が出来るつて訳だ」それに、と三上くんは続ける。

「美香の父親、ハイロウズのアルバム聴いたんだろう？ 何が好みだとか言つてたか」

「ラストの曲だつて言つてた気がします」

「ビンゴ」何が？「あの歌を聴けばわかるよ、人生なんてうんざりしてて当たり前なんだよ、そういう歌を聴いて、妻を殺したんだ。あの歌ならありえる」そう言つて1人でうなずく三上くん。全く話しついていけない。「歌が人を殺人鬼に変えるんですか」

「その通り、だから戦時中は軍歌なんてものがあつたんだろう」「じゃ、話は変わるけど、どうして美香はあんなに演技が上手だったんですか」

「演技なんて死ぬ気になれば誰だつて出来る。人は誰にだつてなれるんだよその気になれば、所詮、人は人だろ」と三上くんは口を尖らせた。

三上くんは役者もある。これは職場の同僚なら誰でも知つていて、生徒でも有名な話しだ。役の練習があるといって、大急ぎで帰つていく日もあれば、休日に舞台があるからこの仕事にしたんだと言つて、非常勤に入りたくない。とふて腐れる日もあつた。舞台でいつも騒がしい三上くんが、さらにやかましい声で叫んだりしてるんだろうと思うと、想像するだけで嫌気がさして、私は一度もその演技を目にしたことはない。日常の小芝居は別だけど。「舞台に来いよ」と三上くんに誘われたこともなかつた。出雲先生は何度か、舞台に足を運んだことがあるよつて、私が感想を訊ねると、「いい」とうなずいた。それから「三上くんの演技は本当にいいんだ」思い

出すよくな顔をして微笑んだ。

そこまで言われると、一度くらいは見てみたいと思つけれど、「俺の演技は輝いてるからな」と三上くん自信に胸を張られると、逆に反発したくなるのが性つてものだらう。

「三上くんのお父さんってどんな方だつたんですか」始業時間が近づき、他の先生が席に付きはじめ、室内の空気がかき混ぜられた頃、私は急に訊きたくなつた。

「どうしてだ」三上くんには珍しく、動搖しているようだ。

「特に意味はないけど、ただ、美香とお父さん見てるとすゞぐく仲いいなあつて。私は父のこと好きじゃなかつたので。それで三上くんはどうなのかなと思つて」

「俺も父親は大嫌いだよ」三上くんの声は、はつきりと通つていた。

三上くんは、いつでも、どんなことでも負けず嫌いだから、その発言も、私に対しライバル心を燃やしているのかと思つたけれど、表情からすると違うようだつた。いつになく強張つた顔だ。「理屈ばっかりこねて、人を人として見てなくて、神のようにならぬ。最低な奴だよ」

「ちよつとわかりづらいんですけど、DVとかではないですね」「そういうのなら、どうにかできるんだけど。違うんだよ。賢くて、真面目で、かなり優秀だつた。でも、それは人としてじゃない」「人としてですか」

「離婚して会わなくなつても、俺は誰よりもあの男を軽蔑してるね」

「そうなんですか」まさか、こんな話になるだらうとは、思わず私の声は小さくなつた。

「今もですか？ 今もそう、軽蔑してるんですか？」

「今か？ 胸を張つてもちろんつて言いたいところだけど、正直わかんないよ」そう言つてお手上げのジェスチャーをして見せた。「年を食つとわからなくなることもあるんだよ」

出雲先生に呼ばれて、私はそれ以上話しを聞けなかつた。

その日の帰り、私は美香の家に寄っていた。美香との生活指導は「」というと、あつけない幕切れだった。

4時限目が終わり、私が割り箸を割ろうとしたとき、小学生と見間違えるほど幼い少年が私の前に現れ、美香が暴力事件を起こしたわけを話してくれた。どうやら、下校途中に新入生を狙つた恐喝が自転車置き場で行われていたらしい。確かにあの場所はよくタバコの吸殻なども落ちていて、教師の目が付きにくい所である。そして彼が脅されているときに、美香が来て華麗に2人の生徒をやつけてしまったということだ。生徒、いや人道の鏡である。何故彼が今になつてその事実を伝えに来たかと言つと、想像すれば簡単なことだ。先生にその事実を伝えることで下手をすれば自分に危害が及ぶだろう、その危険を1度味わうと中々勇気は出ないということだ。

なんであれ、放課後の指導はしなくていいということになり、私は通り道といえないこともない美香の家の方向へ歩いていた。ようするに気がかりなのだ。

認めたくないけれど私は、「母親を殺した父親とそのアリバイを作をした娘」という三上くんの、恐ろしくてたらめだけど、どこか的を付くその推測を、心のどこかで気にしていた。

美香の家に行く理由として、彼女が暴力事件を起こしたそのいきさつを保護者に報告する、ということが大前提なのだけど、言うまでもなく、私はそんなことがどうでもよくなつていた。今は教師よりも探偵なのかもしねり。

大和家のドアの前まで来て、少し思い悩み、そして決心して呼び鈴を押そうとすると、ドアが開いた。出てきたのは美香の父親だった。「美香の中学の先生だよな」

「は、はい」私が名乗ろうとしたとき、彼の方から口を開いた。「ちょっとつきあつてくれないか?」

「はい？」

美香の父親は、少し自棄気味に酒を飲んだ。フリーターからの誘いだからチーンの居酒屋と思っていたけれど、当たが外れた。まあこれはいい意味でだけれど。雑誌でも見たことのある個人経営の焼肉屋に彼は連れて行つてくれた。「匂いが付くけどいいかい」なんて言葉は耳に入らず、私は肉の高さに驚愕していた。「特上ロース・・・3500円」

「この間のあれ、よかつたよ」美香の父親は3杯目のビールを飲んでから言つた。私はまだ1杯目のジョッキを飲み干していなかつた。「あれとはなんですか？」

「ハイロウズのCD」

「ああ」

「昨日はずつと聞いてたよ、ヘッドフォンをつけて音楽聴いたのなんて何年ぶりだろうな」

「フリーターに音楽は不要ですか」

「そうだらうな、けどいいものはいい」まるで他人事のように彼は言つた。冗談を言つてのかどうかわかりづらい顔をしている。もつ少しハッキリした表情が出来ないのだろうか。

「どの歌が好きですか」

「最後の曲だなやつぱり」やつぱりその曲か。私は息を飲んだ、もつ回りくどいことは無しにして、单刀直入に訊こづ、いや少しくらいこのと遠道も必要だ。

「美香さんはいい子ですね」

「ああそうだな、何だかんだいって、あの子はちゃんとということを聞いてくれるしな」彼は予想通り、すぐ認めた。「いい子だよ」

「お父さんと三上くんはビーヴィーこう知り合いなんですか」思い切つて私は言つてみた。

「なんだ、聞いてなかつたのか」そう言つて、6杯目のビールを一気に飲み干す。「あいつは俺にとつて弟子みたいなものでな、よ

く色々面倒かけてくれたよ」そう言つて、大きな声で笑つた。「そうだったんですか、あの人、大事なことは教えてくれないので」

「そうだよな、あいつはいつも肝心なことを言わない、そこがいとこでもあり悪いところでもあるんだよ」

そこで思い立ち、「今、奥さんはどこにいるんですか?」と質問をぶつけた。「殺して、あのバーのどこかに隠してるんでしょ」とは言えないでの、遠まわしに訊ねた。

「あんたは意地悪だね、聞かなくたってわかるだろ、遠い所さ」私は、その返事を聞いて、鳥肌が止まらなくなり、逃げ出したくなつた。しかし彼の眼光の鋭さがそうさせてくれない、酔つているのになんて迫力のある眼なんだろう。恐る恐るたれにつけて食べる肉は旨味などを無視され、私ののどを通りしていく。

私は怖くなつて、それ以上その話はしないことにした。どうやら三上くんの推理は間違つていないようだ。そして私の目の前では片手にジヨックを持ち、もう片方の手で肉を焼く殺人犯がいる。そう冷静に考えると、一気に酔いが冷めた。せっかくほろ酔い気分でいい気持ちだったのに。

店を出る直前、ふと彼が、私に言つた。不意に良いが冷めたかのような、はつきりとした口調だった。「先生は、未来を変えるとと思うかい

「え」

「あなたたちは、3年間子供達と触れ合つことによって、それで、未来が変えられると思うか?」

「いいように、変えればと思つてます」それは本心だ。「現実はそうじゃないかもしれないんですけど」

「そりやいいな、現実。大事なのは現実なんだよ」酔つ払い特有の舌が溶けた様な喋り方だ。「よく大人だって、『未来が見えればな』とほざく奴がいるじゃないか」

「そうですね」私だって、そうなりたいよ。

「そんなの現実逃避もいいところだ、未来が見えてどうなるんだ、

超能力なんてどうするんだよ」

「まあ、そうですが」一体これは何の話題なんだか、と思いつながらも私は未来の世界を想像してみた、遠くを見ようとしても見えるのは「コツケ 680円」の文字だけだ。「でも、自分が超人なんて思える人がいれば、それはそれで幸福なんぢやないですか」

「本当にそう思うのか」

「私は誰でもない、他の誰にも出来ないことを出来るなんて、思つて生きていければ、それだけで生きがいになるんぢやないですか」「アホみたい」彼は目を逸らしてから、「先生は、天才、超人になりたいってのか」

「そこまで思つてないんですけど、正直わからないですね。三上くんが言つてたように人は何にでもなれる気だつてしますし、何にもなれない気だつてします」

「それは俺が三上に言つた話なんだけどな」むすっとした顔で彼が言つ。偉そうに言つてたくせに三上の野郎、受け売りだつたのか。私は3杯目のジョッキを一気に飲み干した。

焼肉屋の代金は割り勘ではなく、おごりだつた。フリーターのどこにそんなお金があるんだろう? 2人だけなのに3万円は超えていた。ファミレスなら10人前は大丈夫だろう。

焼肉の煙が霧のようになつている店を離れ、大通りへ向かつて歩いた。美香の父親は思つたよりも酔つていなくて、呂律は回らないけど、それなりに足取りはしっかりしていた。

「実は先生、話があるんだけど」改装中といつビラが貼られた弁当屋の前で細い路地に入ると、彼はそう言つた。

何ですか、と返事をしようとしたけれど、そこに背後から足音が聞こえてきて、話は立ち消えになる。それどころではなくなつたのだ。

見るからにサラリーマンでとは違うスーツの男達が、私を横に突き飛ばした。あれ、と思ったときに脇にある自販機に腰をぶつけて

いた。

サングラスをかけた男が2人立っていた。彼らは、「物騒」を体にまとつたようにも見えた。美香の父親の肩を軽く叩いてから、睨みつけた。十数年ぶりの同級生との再会出ないことだけは間違いない。

「どこまで逃げるつもりだ」と低い声を発した。「奪つて消えるとは、最低な野郎だ」

すると美香の父親は私の耳元でささやいた、「早く逃げる、そして三上によろしく伝えてくれ」そう言うと彼は、近くに置いてあるゴミ箱を男にぶつけ、ダッシュで大通りに駆けて行つた。私も取り残されないようについていつたけれど、男の足に追いつけるはずもなく、人ごみに混じつて行く彼を見送つて、帰路に着いた。

巡る言葉は、「三上とは弟子のような関係」「大和親子は殺人犯」そして「三上くんは何者だろ?」

私はパニックを通り越し、急なことに脳が着いてこれなくなつたのだろう、急激な睡魔に身を任せた。夢を見る余裕もなく、次の朝を迎えたことは言つまでもない。

別れと兆し

美香の父親と夕食を食べ、黒いスーツの男に追われる彼を見送った、次の朝。私は着信音によつて目覚めた。アラームではなく正真正銘着信のようだ。番号が表示されているので、番号登録されていない人物からかかってきていることは確かだつた。一体誰だろう、こんな朝早くに、時計を見ると5時30分。あと30分は寝ているのに。

「もしもし、大香山ですが」

「おはようございます、誰だかわかりますか」ええもちろん、早朝といつのにどこからそんな凛とした声が出せるんだりと、尊敬してしまつ。「美香さんでしょ」

「はい、あまり時間がないので手短に話させていただきます」と彼女は少し早口で話した。

「昨日は、大和がお世話になつたそうで、なんだか大変だつたんですね、昨日の夜」もう大変なんてものじゃなかつたよ、あんな体験一度としたいし、しないだらうな。

「彼らに見つかつては、あいつものんびりとこのような生活は出来ないです。ですので、さよならです。大香山先生」

「彼ら?それにさよならつてどういう意味なの」私は起きてすぐだから、混乱しているのではなく、本当にわからなかつた。「先生、やつぱり知らなかつたんですね、よかつた」と明るい声が受話器から漏れてきた。知らなくてよかつたこと?

「私はこれから大和といえ、父といったほうが先生からするとわかりやすいですね。あいつと長期の潜伏期間に入るので学校にはもう来れないです、また転校先が決まれば届け出しますので心配なく」

「ちょっとと美香さん、どういうことなのか全然わからないんだけど」と私が言うと彼女は鼻で笑つて、「わたしの本名も知らないなんて、本当に何も知らなかつたんだ。じゃ、せめて名前だけでも教

えておくわ、私の名は天照沙希よ

それだけ言うと彼女は電話を切った。急いでかけなおしても「電波の届かない場所にあるか、電源が入っていません」の繰り返しだった。何かのドッキリかと思い、登校してみたものの、それは真実で2週間が過ぎても彼女は登校しなかった。ためしに自宅に足を運んでみたけれど、表札も消えていて、ならば大家に連絡先を教えてもらうと思ったが、彼は大和なんて親子が住んでいた覚えなどないと言い出し、話が進まないので、諦めるほかなかつた。一体あの親子はどこに消えたのだろう。

唯一の手がかりである三上くんは「知らない」の一点張りで、「どうせ妻殺しが警察にばれかけて逃げたんだろ、それに俺はあの親子とは関係ないんだって、ちょっととした知り合い程度だよ」ともつともな事を言つた。けど焼肉屋での彼、そしてその次の日の彼女はどう考へても演技をしているようと思えなかつた。眞実は本当にひとつなのだろうか、私にはルートが沢山あるようにしか見えない。その眞実を握る大和親子にはもう会えないだろう、あの朝の電話は、私をそんな気にさせた。

けれど意外にも、私はあつさりと再開を果たした。今、まさに三上くんから渡された新聞に載つてるのは、美香の本名だつた。失踪していたなんて知らなかつた。

「それ、いきなり転校していつたやつの名前だろ?」三上くんが言つてくる。

何か引っかかつた、なぜ彼が美香の本名を知つてゐるのだろう、やっぱり何か隠していたのか。

「なんで三上くんが美香の本当の名前を知つてゐるんですか

「本当の名前もクソも天照はあま・・・」そう言いかけて、彼は自分で言つたのに驚いた顔をして、その場を離れようとした。「待つてください、このままだとスッキリしません、教えてください」

「俺はもう手を切つてゐるから、話せることもないんだよ」と苦笑

いを浮かべ、なおも逃げようとする。「じゃあ、大和親子の連絡先を教えてください」

すると三上くんの表情が変わった。真剣な表情だ、獲物を捕らえるかのような眼光で私を見つめて、「知らないぞ、どうなつても」

「覚悟しています」と私は出来る限り胸を張つていった。そうやつて言わないと本当に食われそつたから。

「わかった、あとでメールで送つとくよ。その意気込みはどこからくるのかな?」そう言つて彼は職員室を出て行つた。それから3分後にメールが届き、私はすぐ美香に電話をし、会つ約束をした。

ヒーリング

それから2週間後、私は美香と再会を果たした。

そこは、私の住む町から電車で30分と比較的近く、そのことで潜伏期間を終えたことを美香は伝えたかったのかもしない。待ち合わせ場所は、城跡でつくられた大きな公園で、噴水を目印にすることにした。

待ち合わせ時刻より10分前に着くと、彼女は噴水を眺めながら缶ジュースを飲んでいた。どうやら私のほうが遅かったようだ。

「久しぶり、美香さん。いやサキだけ？どちらで呼べばいい？」
彼女は微笑んで、「お久しぶりです、先生の呼び易い方でかまわな
いです」そう言って、カバンから缶ジュースを取り出し、私に差し
出した。なんて気の利いた子だろう。

「この公園広いでしょ、それにこの暑さ。先生、自販機の場所わ
からないかもって思つて買っておきました」

「ありがとうございます、本当に天の恵みだよ」そう言って私は一気に缶に
入つたお茶を飲み干した。

「もっと味わつたらどうなんですか？」

「のど渴いたときに味わつても意味ないでしょ」

美香の様子は4ヶ月前と変わらなかつた。

「美香さん、失踪してたんだってね」私は言つた。「いきなり核
心を突くようだけど」

「別に核心でもないけど」美香は缶に入つたレモンティーをすす
つた。「新聞見たのね」

「びっくりした」私は頬を緩める。

「そう？ 潜伏と失踪は繋がると思うけど」

そこで私は思い切つて、单刀直入に訊ねた。

「大和美香の父親は一体何者なの」

「やっぱり気付くよね」彼女は、相好を崩し、歯を見せた。

それはそうだ、彼女の苗字は天照であり、大和ではない。いや、

彼も偽名だったのだろう。

「それは違うわ、あいつは本名よ、隠すことが嫌いみたい」
そこは推測違いとして、新聞を見た日の夕方、ニコースを見ていた、たまたま彼女の失踪事件が報道されていて、父親が会見を行っていた。画面を見た私は、その父親が自分の認識している姿とまるで違うことに驚いた。同一人物ではない、これは絶対だ。私の知る美香の父親は、こんな弱弱しい目をしてなくて、体もこんなずんぐりむづくりしてなかつた。

「あの人、父親じゃなくて」美香はとうとう、告白を始めた。

「誰なの」

「詳しいことはわからないです」美香は口を衝いたように言った。
「とぼけてるんじゃなくて、本当にわからないの。ちゃんとしたことは。いきなり会つて去つちゃつうし、だから仕方ないのよ」
「どういうこと」

「私が彼と暮らし始めたのは入学式の前からよ」といった。「部屋で勉強してると大和にいきなり布のようなもので口を覆われ、私はあいつのマンションに連れて行かれたの」

「誘拐？」

「どうやら私に何か確認をとりたかったみたい。大和はそれがあいつに出来る最低限の報いだつて言つてた、その報いが何かわからないけど」

「それで何の確認したの」

「薬を飲んだかどうかの、あいつどこから薬を奪つてきて、私にこの薬を飲んだかどうか確認してきたの」

私は思い出しながら、うなずいた。三上くんから雑誌を見せられた記憶があつた。大学院生が、「犯人は鬼婆のようでした」とコメントして、失笑を買った事件だ。

「もしかして、あの薬剤強盗」

「あいつが犯人だつたみたい」

「マジで？」私は、とつさにそんな言葉が出てしまった。

「マジも何も真実だよ」美香は目を光らせ、「本当のことだよ。

この失踪事件と薬剤強盗の犯人は一緒だつたのよ」

「でもなんで美香さんは逃げなかつたの？ 1人で買い物に行く余裕があればそんなこと簡単じゃないの、それに何で三上くんと知り合いなの？」私はわからないことだけで気持ちが焦つていたのかもしれない。

「一度に何度も質問するなんてバカっぽいですよ。まあいいですけど」そう言って私の眼をじろりと見る。

「薬剤の確認は私のためにやつてくれたの、信じてくれるかわからぬけどあの薬は超能力を目覚めさせる為のものなの」私はあまりに唐突なことを言われたので口が半開きになつてしまつ。「でもその薬は、身体にどんな影響を与えるかわからないから危険だつてことで、彼は確認しに来たの、まあそんなこと言われても、ずいぶん前に飲んじやつてたから意味ないけどね」私は適当に相槌をした。

「三上先生と大和の関係についてよくわからないけど、多分昔の同僚だつたのかと思います」そういえば、彼は三上くんと師弟関係にあるといつていた気がする。

「どうやら、その薬のこと三上先生は詳しいらしくて、私がその薬を摂取してしまつたのどうすれば言いが訊ねる為に、私を彼の中学に入学させたようです」

「どうしてそんなめんどくさいことをしたの？ 普通に校門前で待つてれば会えるでしょ」

「先生？ 私の話し信じてないでしょ、超能力者になれる薬を奪つてしまえばいろいろな人から目をつけられるのは当たり前でしょ、そんな指名手配みたいな人が校門でずっと人を待つことなんて出来る？」

「それはそうだけど」あまりに彼女が凄んで言つので、思わずつなづいてしまつた。

「でしょ？だからわざわざ問題を起こして生徒指導させると、いつ回りくどい方法をとったの、それが一番手っ取り早いからね」
だから彼女は指導のときに親を呼ぶと言つと喜んでいたのか。

「けど三上先生は中々切れ者の方が、私の苗字と薬剤強盗で、私が彼の使いだということに気付いたらしくて、CDの中に入れてくれたわけ」私はただ、関心することしかできなかつた。

「それで父親のフリをしてたんだ」

「そうよ、三上先生と大和が連絡を取れるようにするのが私の使命だつたからね」

「使命だなんて大袈裟な」と私が半分笑うように言つと、「すごい達成感でしたね、もう笑えました。なんたつて命がかかつてたんだから」それは冗談で言つてゐるよう聞こえなかつた。

「それでメモに書かれたバーに2人は待ち合わせたの。大和、先生が面接を次の日にしたって言つたのに断つたでしょ」

「そうだつた気がする」全く忘れてしまつてたけど、だから用事があるなんて嘘ついたんだ。

「まあその日は、私と遊園地に行く約束してたのに。まあ薬のことが最重要だから仕方ないけど」と美香は眉を下げた。どうやら今になつてもその怒りは收まらないらしい。それよりあたしの記憶力はどうなつてるんだろう、ほとんど覚えてないや。

「私もそのバーに行くはずだつたのに、大和のやつ危険だからつていつて私を除者にしたのよ、私も当事者だつてのに」どうやら彼女は一度感情を爆発させると收まらないらしい。そういうえば生徒指導が終わつたあとも大笑いしてたつけな。

「それで悔しくなつて私も行くことにしたの」

「何で私も連れて行つてくれたの？」そう言つと彼女はしかめつ面をして、「それが唯一の誤算だつた」と言つた。

「先生がメモを読んだつて、知つたかぶる態度とつたから私も勘違いして、大和に関係者つて伝えちゃつたのよ」

「それで2人はバーで、何を話したの」

「知らない、教えてくれなかつた」美香は寂しくもあり悲しくもある表情を浮かべた。

「バーの店員も大和たちの関係者だつたらしくて、だから私たち追い出されたのよ」確かにあの店員は異常すぎた、いくら記憶力のない私でもそれは覚えている。

「あの数日にそんなことがあつたなんて」

「そうよ、そして次の日油断して、先生と食事に行つたときに見つかつちゃつたつてわけ」たつた一度羽田を外すだけで見つかってしまうなんてすげくシビアな世界だ。

「ありがとうございます、大体話は掴めたわ」と強盗から始まり逃走劇で終わった話しを理解したつもりでいた、ただひとつ、超能力つてワードが気になるけど。

「先生どこか怪我してるとこない?」と私の体を薄ら笑いをしながら舐めるように見た。

「ないかな? けど最近疲れてるせいか、小指の逆剥けがなくならないの、それがちょっと痛いかな?」と本当に小さすぎて怪我であるかも判断しにくい右小指を彼女に差し出した。

「ちょっと待つてくださいね」そう言つと彼女は目を大きく見開き、私の小指に両手を覆いかぶせるような形で包んだ。「最近いつでもできるようになつたんです」そう言つて朗らかな笑顔を私に向けた瞬間、いきなり右小指の辺りが暖かくなつた。

その暖かさがとても心地よく、ぬるま湯につかつたみたい。それは小指だけ日向ぼっこしている感覚に近いのかもしれない。よく見ると皮膚が逆再生したみたいに張り合わされ、数週間前のキレイな小指になつた。私は声が出なかつた。ただ自分の小指を全角度から見て、それから美香の手に触れて、表と裏をじっくり見て、どこかに力い口でも付いてるのかありえないことを確認してみたけど、もちろんそれはありえなくて、長く細い整つた指と手にしか見えなかつた。

「ね? 嘘じゃないでしょ」と彼女は今までにないくらい優しく

微笑んだ。そして「二上までなるのに苦労したんだよ、それにこれが私の生きがいだから」と今まで一番輝いた顔をした。

まだ呆然としている私はただ、「すごい」を連續して言った。

「当たり前でしょ？ 超能力なんだから」そう言う彼女はまるで天使のように見えた。「人を治癒したのは初めてだから先生が人類初かもね」なんて光榮なことを言ってくれた。

それからしばらく話し込んでしまい、気付いたら空がオレンジ色になっていた。

「それじゃ、そろそろ帰るね。明日も仕事だから」私がそう言つて手を振ると美香も手を振つて見送つてくれた、気のせいか彼女の頬に光るもののが見えた。私は精一杯の声で、「また会おうね！ あんたいい子だから私の弟子にしてあげるから」と叫ぶと、美香は手でそれを拭いながら、「ありがとうございます」と言つてしゃがみ込み、最後に、「二上先生とお幸せに」と泣きじやくりながら言った。

だから二上くんとは何もないつての。

私は駅に向かって、早歩きをしていた。そのままじゃあの駅近くのスーパーのタイムセールに間に合わないからだ。ついつい長話をしてしまった。

急ぎながらも私は幸せな気分に包まれていた。1人の生徒にあれだけ好かれるなんて思つてもいなかつたからだ、にしても、美香は本当に私と三上くんがお似合いだとでも思つてるんだろうか・・・。少し考えてみる。

ふと自分の頬を触ると柔らかくなっていることに気付いた。どうやら私もまんざらでもないらしい。

そういう未来もいいなと考えていると、駅が見えてきた。時計を見ると17時40分、18時までに間に合うかは微妙なラインだ。そう思い駆け出した瞬間、耳にしたことのない音が響いた。その音を好む生物は存在しないだろ？私は全身から振ってでた震えに耐えられなくなり座り込んでしまった。目の前によく知る人物がうずくまっていた。

「三上くん！？」

右の胸辺りを押さえうめき声を上げている、よく見なくても体が血に塗れているのがわかつた。私は何が起きてるのかわからず、必死に三上くんの側に寄つた。膝が震えて、立つことが出来ないので四つんばいで近づく。

「何でこんなところにいるの？」私がそう言つと彼は深い傷を負つているくせにそれに似合わない笑顔で、「お前が天照と会つて言つてたから後をついてきたんだよ」

「私のせいなの？もしかして私が薬のこと知つたから？」自分で何を言つているのかわからず、喘ぐ声を必死に押さえて喋つた。

「お前のせいじゃないよ、どの道こうなつてたんだよ、俺は。俺

「セーメんな、巻き込んじまつて」

「私が、私が望んだことだから仕方ないの」

「いや、本当にすまない。やっぱり逃げたって一緒なんだな、また苦しむのがオチなんだよ」私の歓迎会をしたときとよく似たことを言った。

振り返ると、黒いスーツとサングラスをした男が2人銃を持って私と三上くんを囲んでいた。

やつと繋がつた。

美香が泣いていたのは、私がこうなるとわかつていたからだ。けどうれしいよ、私の意志を尊重してくれて、その上で泣いてくれるなんて。やっぱりいい子だよ、さすが私の弟子だよ。けどこの悲しみは美香の中ですつと巡っていくんだろうな。ごめんね、ダメな師匠で。

私は三上くんに覆いかぶさり、最期の時を待つた。きれいな小指を眺めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1758d/>

めぐる

2010年10月11日14時34分発行